

## 草戸千軒町遺跡における ビロースクタイプ白磁碗の出土状況

The Excavation State of the Birosuku Type White Porcelain Bowls in the Kusado Sengen-cho Site  
SUZUKI Yasuyuki

鈴木康之

### はじめに

日本列島における貿易陶磁器の考古学的な研究は、1970年代以降の国土開発の激化がもたらした発掘調査事例の増加と出土資料の蓄積を背景に、着実な進展を見せている。ただ、研究が深化するなかであって、いまだに不明確な点を多く残しているのが、14世紀中頃から15世紀初頭にかけての様相ではないだろうか。南北朝時代を中心とするこの時期、本州から四国・九州にかけての日本列島の中央部では貿易陶磁器の出土量が減少し、その動向がつかみにくくなる。また、出土資料の動向が不明確になるのは貿易陶磁器だけではなく、鎌倉時代に広範囲に流通していた国産陶器の出土量や遺跡そのものの数も減少し、この時期の社会が大きな変換点を迎えていたことを反映する現象と考えられている。

一方、琉球列島においては14世紀以降貿易陶磁器の出土量が増加することが知られていたが、近年はその分類・編年研究が進展するとともに〔吉岡・門上 2011, 瀬戸 2013・2014 など〕、中国をはじめとする東アジア各地における窯跡の調査も進展したことにより〔森 2015 など〕、14世紀代の日本列島における貿易陶磁器の出土状況の変化が、環東シナ海域の流通体制の転換を反映するものであることが明らかになりつつある〔亀井 1993・1997 など〕。具体的には、博多を集散地として日本列島の各地に広がる経路の果たした役割が相対的に低下し、琉球列島を経由して北上する経路の果たす役割の重要性が増してきた状況が、より具体的に復元できるようになってきた。

こうした琉球列島をめぐる貿易陶磁器の流通経路の変化を象徴する製品として注目されているのが、ここで取り上げるビロースクタイプ、今帰仁タイプと呼ばれる中国産白磁の一群である。後述するように、これらの製品は琉球列島においては一般的に出土するものの、日本列島におけるそれ以外の地域では出土量がきわめて少ないとされてきた。しかし、近年の研究の進展を受け、あらためて各地の出土資料を見直してみると、出土量は少ないながらも一定量が分布する状況を見いだすことができるようである。そうした製品の分布状況を明らかにすることができれば、想定されている環東シナ海域をめぐる陶磁器流通の転換が、その末端に連なる列島各地の流通にどのような影響をおよぼしたのかを検討することも可能になるであろう。

そのような問題意識のもと、本稿においては広島県福山市の草戸千軒町遺跡から出土した貿易陶

磁器から、ビロースクタイプ、今帰仁タイプに比定できる資料を抽出・紹介し、基礎的なデータとして提供したい。

## 1 ビロースクタイプ白磁碗について

ビロースクタイプ白磁碗は、沖縄県石垣市のビロースク遺跡出土資料を指標に分類された口縁部が内湾する白磁碗である〔金武 1988〕。そのご、沖縄県今帰仁村の今帰仁城跡においてこれらと類似する直口の白磁碗が抽出され、今帰仁タイプとして分類されている〔金武ほか 1991〕。これらの製品は、日本国内でも琉球列島に特徴的に分布することから、琉球列島をめぐる陶磁器貿易のあり方を示す重要な資料として注目されていた。さらに近年の現地踏査にもとづく研究により、ビロースクタイプ、今帰仁タイプの生産地が、中国福建省の沿岸部一帯に位置する浦口窯・閩清窯などに比定できることが確認されている〔森本・田中 2004, 田中 2009a, 宮城 2009〕。金武正紀による分類では、ビロースクタイプは次のとおりⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に分類されている〔金武 2009〕。

ビロースクタイプⅠ類：内彎形で、口唇内端を丸く成形する。内面上部には圈線をめぐらし、下部には櫛描文のあるものもみられる。

ビロースクタイプⅡ類：内彎形で、口唇は丸みを持ち口唇内端は内傾し、稜を示すものが多い。

ビロースクタイプⅢ類：口縁部が外反することに特徴があり、内底が平坦で、そこに印花文を施すものが多い。

また、これらのビロースクタイプに先行すると考えられているのが今帰仁タイプで、同じく金武により、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類に分類されている〔金武 2009〕。

今帰仁タイプⅠ類：口唇部内側に稜をもち、口唇部を平坦に成形する。高台は「ハ」字状に広がり、畳付外端を面取りしない。内底の釉を環状に掻き取る。

今帰仁タイプⅡ類：口縁部や高台の形態はⅠ類と同様であるが、内底下位と外面下位に釉を掛けず、露胎とする。

今帰仁タイプⅢ類：高台の形態はⅠ・Ⅱ類と同様であるが、口唇部を丸く仕上げる点に特徴がある。外面下位を露胎にするが、内底面は施釉するものと露胎にするものがある。

## 2 草戸千軒町遺跡出土資料の紹介

草戸千軒町遺跡は、広島県福山市草戸町に所在する中世集落遺跡である。中国山地に源を発し、福山市内で瀬戸内海へと流れ込む芦田川の河川整備事業にともなって、1961年から30年余にわたる発掘調査が実施された。その結果、この集落跡はかつての芦田川の河口近くに立地し、13世紀中頃から16世紀初頭にかけて存続した港湾集落の跡であることが明らかになっている〔鈴木 2007〕。

遺跡からは100万点を超えると思われる遺物が出土しているが、そのうち生産地が日本列島外に求められる貿易陶磁器は、破片数にして約15,000点確認できている。これらの資料を今回あらためて調査したところ、ビロースクタイプⅢ類に分類できると思われる資料を10点と、今帰仁タイプⅠ類に分類できる可能性のある資料を4点抽出することができた。

図1(1～10)に掲げた10点は、ビロースクタイプⅢ類に分類できる資料である。いずれもわずかに灰色味を帯びる緻密な胎土に透明の釉薬を掛けるもので、外底は露胎としている。断面が台形

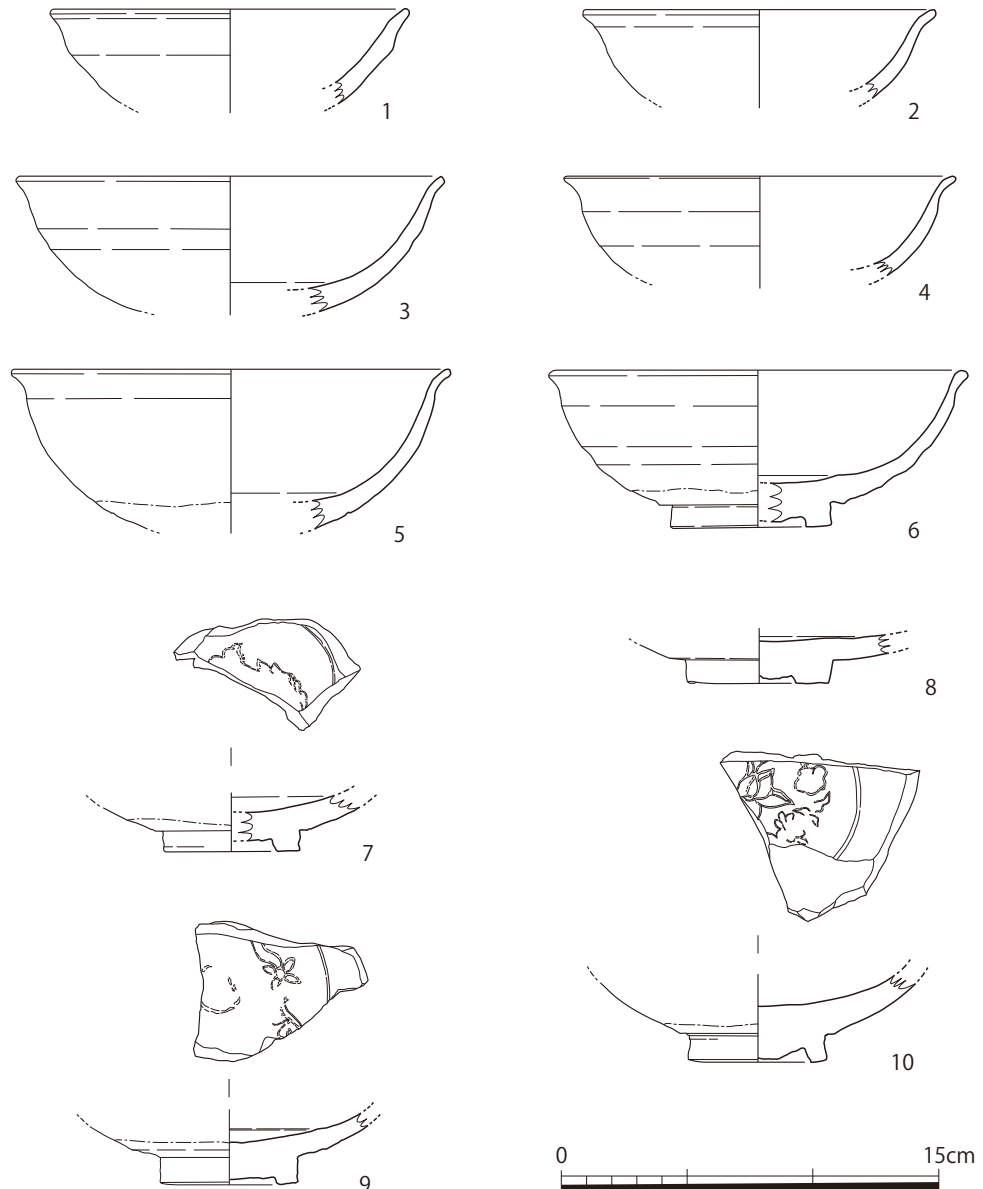


図1 草戸千軒町遺跡出土ビロースクタイプ白磁碗

を呈する輪高台を削り出し、7・9・10の内底面には圈線がめぐり、その内側に印花文が施されている。6・8は内底面の残る資料で、内底面に圈線がめぐるが印花文は確認できない。

図2(11～14)に掲げた4点は、今帰仁タイプⅠ類の可能性のある資料である。いずれも底部の破片で全形が確認できないため、今帰仁タイプに含めることができるか断定しかねるが、可能性のある資料として紹介しておきたい。いずれもやや外側に開く断面台形の輪高台を削り出し、外底を露胎にするとともに、内底面の釉を環状に掻き取っている。灰色味を帯びる比較的緻密な胎土をもち、露胎部分が褐色に発色する傾向が認められる点にも共通する特徴がある。

田中克子によれば、博多遺跡群からは20点のビロースクタイプ（そのうちⅢ類は14点）と、4点

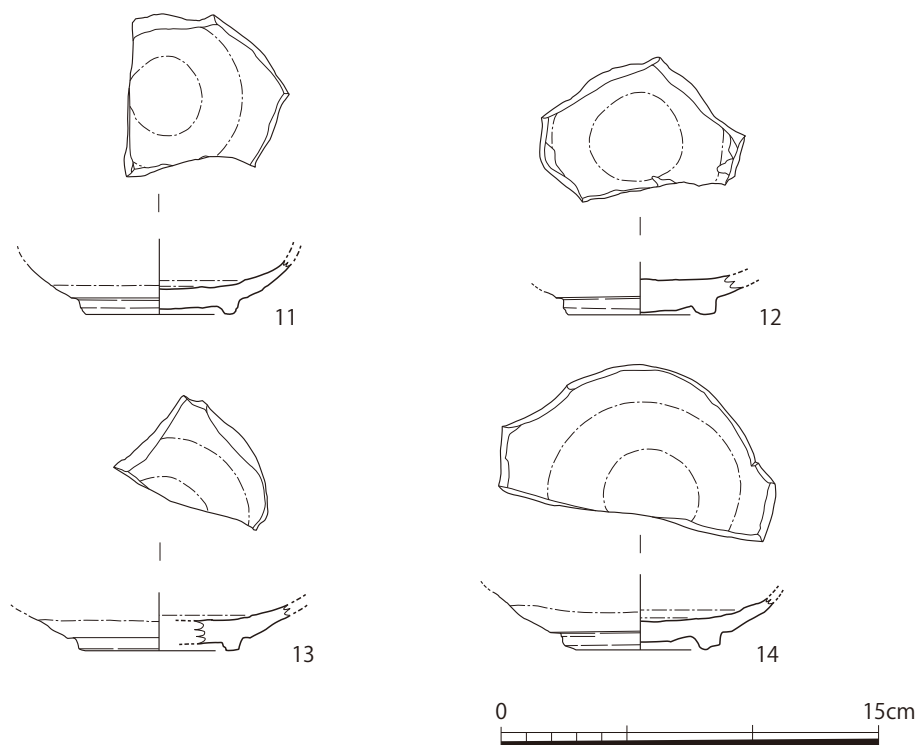


図2 草戸千軒町遺跡出土今帰仁タイプ白磁碗

の今帰仁タイプの特徴を示す資料（そのうちⅠ類は2点）を抽出できるという〔田中 2009b〕。中世随一の貿易港である博多と比べ、遜色のない点数が草戸千軒町遺跡から出土しているようにも思われるが、田中が紹介する博多遺跡群の資料は、報告書に掲載された資料の点数であることから、実際の博多遺跡群にはさらに多くの資料が存在する可能性が高い。出土量の評価については、より多くの遺跡における出土事例を調査したうえで比較・検討しなければならない。

### 3 製品の時期について

出土資料の詳細は、表1（ビロースクタイプ）および表2（今帰仁タイプ）のとおりである。出土点数が少ないこともあって、特定の区域に集中して出土するような傾向は見いだすことができない。

出土遺構から製品の廃棄された時期が明らかにできるのは、ビロースクタイプでは1～4, 6～8・10の8点、今帰仁タイプでは12の1点である。ただし、6・10は中世集落が廃絶したのちの近世段階（Ⅴ期前半：おそらくは17世紀後半）の遺構から出土したもので、中世集落に関する資料が近世の遺構に混入した可能性が高い。

草戸千軒町遺跡における中世集落の時期区分は、Ⅰ期前半：13世紀中頃、Ⅰ期後半：13世紀後半、Ⅱ期前半：14世紀初頭、Ⅱ期後半 14世紀前半、Ⅲ期：15世紀前半～中頃、Ⅳ期前半：15世紀後半：Ⅳ期後半：15世紀末～16世紀初頭という暦年代を充てている〔鈴木 2016〕。したがって、この遺跡においてビロースクタイプⅢ類はⅢ期～Ⅳ期後半、暦年代では15世紀前半～16世紀初頭にかけて廃棄された製品だと判断できる。また今帰仁タイプⅠ類は、Ⅳ期後半、暦年代は15世紀末か

表1 草戸千軒町遺跡出土ビロースクタイプ白磁碗一覧

挿図番号	調査次数	出土遺構	時期	暦年代	破片番号	資料番号
1	12	SK582	Ⅳ期前半	15世紀後半	12-128	
2	38	SD3891	Ⅳ期後半	15世紀末～16世紀初頭	38-076	
3	30	SE2350掘形	Ⅳ期後半	15世紀末～16世紀初頭	30-222	
4	42	SK4473	Ⅲ期	15世紀前半～中頃	42-118	
5	35	包含層			35-395	
6	32	SG1800	Ⅴ期前半	近世	32-122	32O00196
7	30	SA2090	Ⅳ期	15世紀後半～16世紀初頭	30-081	
8	40	SD3891	Ⅳ期後半	15世紀末～16世紀初頭	40-018	
9	34	表土砂層			34-293	
10	48	SG4240	Ⅴ期前半	近世	48-016	

表2 草戸千軒町遺跡出土今帰仁タイプ白磁碗一覧

挿図番号	調査次数	出土遺構	時期	暦年代	破片番号	資料番号
11	4	包含層			04-093	
12	42	SD4456	Ⅳ期後半	15世紀末～16世紀初頭	42-196	
13	41	表土層			41-075	
14	6	包含層			06-003	

ら16世紀初頭にかけて廃棄された資料ということになる。ただ、今帰仁タイプⅠ類については資料点数が1点のみと少なく、この1点が製品の動向を正しく反映しているかどうかは疑問である。

複数の点数が確認できるビロースクタイプⅢ類について見ていくと、Ⅰ期～Ⅱ期の遺構からは出土していないことから、集落への搬入時期についてもⅢ期（15世紀前半～中頃）以降とみなすことができるだろう。博多遺跡群においても、ビロースクタイプⅢ類の出土時期は15世紀前半頃と考えられていることから、草戸千軒町遺跡においてもこの時期になって新たに搬入されるようになったことが想定できる。ちなみに、博多遺跡群において今帰仁タイプの出土時期は、おおむね13世紀後半～14世紀代に収まるとされており、図2-12の出土遺構が示すⅣ期後半（15世紀末～16世紀初頭）という年代は、集落への搬入年代から大きく隔たっている可能性が高い。

#### 4 草戸千軒町遺跡にみる貿易陶磁器流通の画期

草戸千軒町遺跡においては、14世紀後半を前後する時期の遺構・遺物がほとんど確認できず、この時期の集落が停滞期にあったと考えている〔鈴木 2007〕。つまり、Ⅰ期前半（13世紀中頃）に成立した集落はⅡ期後半（14世紀前半）にかけて継続的に発展していくものの、Ⅱ期後半の段階で大部分の施設が廃絶し、そのごⅢ期（15世紀前半）までの間に50年以上におよぶ空白の期間がある。

この空白期間の前後では、出土する土器・陶磁器の種類には大きな差が認められる。たとえば、土師質土器供膳具においては、Ⅰ期～Ⅱ期では丸底の碗を中心とする器種組成が見られるが、Ⅲ期以降には碗が消滅し、大小の平底の皿のみの組成へと変化している。集落の停滞期である14世紀後半に、集落をとりまく社会・経済の状況が大きく変化していたことは間違いないことであろう。

草戸千軒町遺跡から出土した貿易陶磁器を調査した柴田圭子は、Ⅰ～Ⅱ期にかけての出土資料に



比べ、Ⅲ～Ⅳ期の資料には粗製品が多いことを指摘している〔柴田 2016〕。そうした粗製品の中心を占める資料として、瀬戸哲也が沖縄県出土資料をもとに分類した青磁Ⅳ類新相・Ⅳ'類や〔瀬戸 2013・2015〕、ここで紹介したビロースクタイプⅢ類などを挙げ、それらがこの時期までに新たに拓かれた九州東岸から瀬戸内海へといったルートによってもたらされた可能性を指摘している。

瀬戸内海をとりまく地域の14世紀代の流通経路の転換をここで論じる用意はないが、草戸千軒町遺跡の近隣では、尾道遺跡（広島県尾道市）や三太刀遺跡（広島県三原市）などの出土資料のなかに、ビロースクタイプや今帰仁タイプに比定できると思われる資料が散見される。今後、そうした資料を抽出し、その分布状況や年代を明らかにしていくことによって、当該期の流通経路の解明に近づくことが可能になるものと思われる。本報告は、そのためのごく初歩的な作業として実施したものである。

なお、ここで紹介した草戸千軒町遺跡出土資料は、いずれも広島県立歴史博物館の所蔵品である。資料調査に際しては、尾崎光伸氏のお世話になった。また、柴田圭子氏・宮城弘樹氏からも資料についての教示を得た。

#### 参考文献

- 亀井明徳 1993「西南諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号、上智大学アジア文化研究所、pp. 11-44  
亀井明徳 1997「東シナ海をめぐる交易の構図」『考古学による日本歴史 10 対外交渉』雄山閣出版、pp. 77-88  
金武正紀 1988「ビロースクタイプの白磁碗について」『貿易陶磁研究』NO. 8、日本貿易陶磁研究会、pp. 148-157  
金武正紀 2009「今帰仁タイプとビロースクタイプ：設定の経緯・定義・分類」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室、pp. 21-26  
金武正紀・宮里末廣・松田朝雄 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村教育委員会  
柴田圭子 2015「グスク時代における陶磁の受容」『南島考古』第34号、沖縄考古学会、pp. 19-32  
柴田圭子 2016「消費遺跡から見た元末明初中国陶磁の受容と流通」『陶磁器研究』NO. 35、日本貿易陶磁研究会、pp. 54-73  
鈴木康之 2007『中世瀬戸内の港町 草戸千軒町遺跡』（シリーズ「遺跡を学ぶ」040）新泉社  
鈴木康之 2016「草戸千軒町遺跡における集落の画期とその暦年代―木簡に記された十二支にもとづく試案―」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集刊行会、pp. 485-497  
瀬戸哲也 2013「沖縄における14・15世紀中国陶磁編年の再検討」『中近世土器の基礎研究』25、日本中世土器研究会、pp. 113-126  
瀬戸哲也 2015「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』NO. 35、日本貿易陶磁研究会、pp. 17-32  
田中克子 2009a「ビロースクタイプに関わる窯跡とその製品：福建省閩江流域窯跡の踏査と関連資料の調査」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室、pp. 51-71  
田中克子 2009b「博多遺跡群における出土状況」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室、pp. 93-101  
田中克子 2009c「生産と流通」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室、pp. 137-143  
宮城弘樹 2009「今帰仁タイプに関わる窯跡とその製品：福建省連江県浦口窯跡の踏査と関連資料の調査」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室、pp. 38-50  
森達也 2015『中国青瓷の研究―流通と編年―』汲古書院  
森本朝子・田中克子 2004「沖縄出土の貿易陶磁の問題点―中国粗製白磁とベトナム初期貿易陶磁―」『グスク文化を考える』新人物往来社、pp. 353-370  
吉岡康暢・門上秀叡 2011『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社

（県立広島大学地域創生学部）

（2020年7月9日受付、2020年10月16日審査終了）